巻　頭　言

仰げば星斗(せいとらんかん)爛煥として
永遠の真理を囁(ささやく)く
頭(こうべ) を巡(めぐ)らせば(せばそざん)蘇山遠々として
我等若人(われらわこうど)の情熱をそそる
天地の恵み豊かなる肥後の一角
立山(りつざん)の 麓(ふもと) 白川(ほとり)が 畔
これぞ我等(われら)五高健児の地なり
いざや舞わんかな狂わんかな唄わんかな
我等(われら)が剛毅木訥(ごうきぼくとつ)の調べを

武夫原頭(ぶふげんとう)に草萌(くさも)えて
一(Eins)、 二(Zwei) 、三(Drei)

武夫原頭(ぶふげんとう)に草萌えて　花の香(か)甘く夢に入り
竜田の山に秋逝(ゆ)いて　雁(かりがね)が音遠き月影に
高く聳(そび)ゆる三寮(さんりょう)の　歴史やうつる十余年

それ西海(さいかい)の一聖地(いっせいち)　濁世(だくせ)の波をとわにせき
健児が胸に青春の　意気や溢(あふ)るる五高魂(ごこうこん)
その剛健の質なりて　玲瓏(れいろう)てらす人の道

時潮(じちょう)の巡(めぐ)りたゆみなく　移りてここに十年の
思いや狂う胡北(こほく)の地　断雲(だんうん)乱れ飛ぶ所
斬魔(ざんま)の 剣(つるぎ) 音冴(おと さ)えて　スラブの末路(まつろ)今ぞ見る

時艱(ときかん)にして義を思い　塵世(じんせ)に節(せつ)を偲(しの)ぶかな
ああ薪興(しんこう)の気を負いて　浮華(ふうか)の 巷(ちまた) にわれ立てば
思いは馳(は)する朴訥(ぼくとつ)の　流風(りゅうふう)かおる銀杏城(いちょうじょう)

さらば我が友叫ばずや　時と人とを諭(さと)すべく
見よ竜南(りゅうなん)に一道(いちどう)の　正気(せいき)ありてぞ日の本の
青年(せいねん)の名に力あり　二十世紀に光あり、二十世紀に光あり